

古くて新しい、持続可能なコミュニティ

島根県出雲市伊野地区

伊野地区自治協会・伊野^{みら}やって未来こい！ネット





西暦733年。この年に完成し、現存する風土記の中で唯一ほぼ完本の状態に残されている『出雲国風土記』に、今回訪れた地区の古い名が載っている。

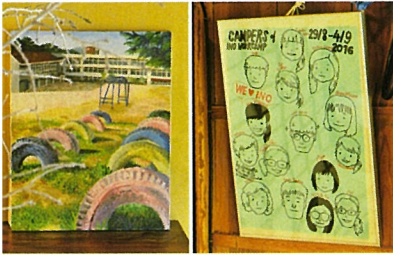
伊農郷 郡家正西一十四里二百歩（『出雲国風土記』）

また、「伊農郷」（いぬのさと）という地名の由来は神々の会話から生まれたと、この風土記に記されている。この書物が現在もあり、そして、そこに記されている地域に今も人々が暮らしている。これは、どんなに世の中が変化しようとも、人々はコミュニティを作り、知恵を出し合い協力しながら、それを継続させてきたことを証明する。その書物に留められた地域は、北は日本海、南は宍道湖を臨み、山々に美しい棚田が広がる。島根県出雲市の伊野地区だ。

伊野地区の人口は2023年時点で1186人。2032年には1000人を割ると予想されている。この人口減少に対し、持続可能な地域づくりを目指して伊野地区自治協会と伊野のまちづくりを推進する「伊野やって未来こい！ネット」が活動を行っている。

伊野の人々が人口減少の問題に取り組むことになったのは2012年。出雲市から地区の伊野小学校と隣接する2つの小学校の統合案が示されたことがきっかけだった。この提案に、伊野の人々は約2年半の議論の末、統合しないと決めた。当時、保護者の間では統合に賛成の人も多かったというが、これを決めた以上、学校を残してよかったといえる地域づくりをめざしている。その取り組みについて、伊野地区自治協会会長の錦織宏さんと「伊野やって未来こい！ネット」事務局長の多久和祥司さんに話を伺った。

伊野地区自治協会では、主に二つのテーマで活動している。一つは、「まちづくり×学校で『子育てするなら伊野で』。地区の農業を活性化しようと2014年から2回実施している産直市「伊野いち」。ここで、小学5・6年生が宣伝や販売などの役割を担ってもらい、主体的に行動できる機会を提供。また、



外国や日本の学生を招いて交流などを行う国際ワークキャンプを2016年から始め、伊野小学校の宿泊研修とのコラボが実現している。もう一つは、「まちづくり×関係人口（伊野の応援団）で活動の輪を広げる」。伊野の魅力に共感・協力する人々を増やすことを目的に、2017年から「伊野ふるさと会員（伊野のまちづくりサポーター）」を作る。伊野地区出身者や伊野のまちづくりに関心を寄せる人々に一口5千円の寄付で「ふるさと会員」になってもらい、伊野のまちづくりが支えられている。

さらに、10年後の伊野地区を考えるため、住民を巻き込んだ「まちづくりフォーラム」を2018年から3回実施。その成果として、2019年に「伊野の未来創造戦略会議」が発足。持続可能な伊野をつくるための「伊野将来ビジョン」を完成させ、このビジョンを実現させるために誕生したのが「伊野やって未来こい！ネット」だった。

今回、「伊野やって未来こい！ネット」には、7つの部会、教育部会、農業・水産業部会、福祉・医療・暮らし部会、安全・安心部会、交流部会、情報発信部会、学生部会がある。「交流部会」と「農業・水産業部会」を取材した。

「交流部会」では、地区内と地区外の交流の活性化に重点を置いている。この部会長である多和秀政さんは、地元出身で陸上の選手をやっていた経験を生かし、舗装がされていない山道などを走る、トレイル・ランのイベントを開催。昨年で第6回の開催となり、地区外からの参加が多く、伊野を知ってもらおう機会になっている。

また、2020年からは「たるみ邸」という古民家を活用。地区の方々や地区外の方々の交流拠点となっており、音楽会の開催や島根大学の留学生たちが地域を学ぶ拠点にもなっている。

伊野地区の農業・水産業の問題に取り組むのが、「農業・水産業部会」代表の常松守男さん。伊野地区では農業従事者が減少し、耕作放棄地が増加している。そこで、関係人口の増加と景観保存を目的に、耕作放棄地をソバ畑にする「耕作放棄地復活プロ





プロジェクト」を実施している。

また、「生活のための農業」から「楽しむための農業」にシフトしていけるよう、2020年に伊野の食材を販売する場所である「よっ得!?伊野いち」を国道沿いに開店。毎週、金・土曜日の9時から12時に営業し、伊野の農産物だけではなく、水産物や米、雑貨類なども販売し、200人以上の交流人口が生まれている。

伊野地区のこれらの取り組みには、地域おこし協力隊も関わっている。2022年4月から地域おこし協力隊員として伊野地区で活動するのが、朝枝尚子さんだ。朝枝さんは元々島根県の出身で、滋賀県に暮らしていたが、子どもの進学を機にUターンしてきた。伊野地区にやってきた。大学時代は農学部で学び、小さな頃から山と海で遊んでいた思い出が、伊野地区を選んだきっかけに。

「伊野は人を受け入れてくれる地域で、何か企画した時に、すぐにサポートしてくれる」。そんな朝枝さんの言葉通り、野草やハーブを使ったイベントの実施や、自家製の焼肉のタレ「Inotate」の販売など、伊野地区で自立していくための活動が進んでいる。

現在、伊野地区では「出雲の小さな村の古民家復活プロジェクト」として、クラウドファンディングを実施している。「地域を変えるのは人と人のつながり。たるみ邸を子どもから高齢者まで誰でも利用できる場に、地域の未来をつくるエネルギーを生み出したい」。この目的のため、交流部会の拠点となっている「たるみ邸」を改修し、関係人口をより増やしていく。

様々な人々を巻き込み、古代から続くコミュニティに、新たなアイデンティティを育てていく取り組みが続いている。

【連絡先】

伊野やって未来こい! ネット事務局長 多久和祥司
メール:chikurin@hit-5.net

